

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

国語 第123号

— 高等学校，特別支援学校対象 —

平成24年4月発行

「古典A」における単元構想の在り方 — 『平家物語』の教材編成を中心に —

平成20年3月に小学校・中学校の学習指導要領，平成21年3月に高等学校の学習指導要領がそれぞれ告示された。新たに〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が設けられ，人間形成の上で必要なこととして，言語文化に対して広くかつ深い関心をもたせることが求められている。「伝統的な言語文化」については，次の3点に分類できる。

- ・ 我が国の歴史の中で創造され，継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの，つまり文化としての言語
- ・ それらを実際の生活で使用することで形成されてきた文化的な言語生活
- ・ 上代から現代までの各時代にわたって，表現，受容されてきた多様な言語芸術や芸能など

平成22年6月発行の高等学校学習指導要領解説国語編には，「言語文化に関する指導の重視」として次のように述べられている。

共通必修履修科目である「国語総合」に，小学校及び中学校と同様に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕を設けるとともに，我が国の伝統と文化，とりわけ言語文化に対する理解を深めることを主なねらいとする科目「現代文A」，「古典A」を設けている。

そこで，本稿では，伝統的な言語文化としての古典を教材とする「古典A」における単元構想の在り方について述べる。

1 「古典A」の特色

「古典A」は，これまでの「古典講読」の内容を改善して，「現代文A」と対をなす科目として置かれた選択科目である。「国語総合」の3領域1事項のうち，「C読むこと」の古典の分野と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕とを中心として，その内容を発展させている。学習指導要領解説には「古典A」の特色が次のように示されている（下線は筆者による）。

目標

- ・ 伝統的な言語文化に対する理解を深める
- ・ 生涯にわたって古典に親しむ態度を育成

主な内容

- ・ 言語文化について探究する
- ・ 古文と漢文のいずれか一方を教材とした指導でも可

教材

- ・ 特定の文章や作品，文種や形態でまとまりのあるものを中心
- ・ 古典に関連する近代以降の文章を必ず含める

特に下線部に着目し，学習指導要領を踏まえて，特定の作品（『平家物語』）を教材として，「古典A」における単元構想の在り方について考察することとする。

2 「古典A」における「学習テーマ」(例)

「古典A」は、伝統的な言語文化を継承して現代に生かすために、古典への興味・関心を広げることが重視している科目である。「古典A」において単元を構想するに当たっては、生徒に興味・関心を抱かせるような「学習テーマ」を設定しておくことが望ましい。

本稿で構想する単元の教材である『平家物語』においては、貴族の社会から武士の社会へと変わる激動の時代を背景とした物語が展開する。そのような時代背景を踏まえて、「変動する時代の中の人間の生き方を探る」という「学習テーマ」を設定することが考えられる。自分が生きている現代を見つめさせたり、人間としての生き方を考えさせたりすることがねらいである。

3 「古典A」の単元構想の手順(例)

学習指導要領の「内容」に示されている指導事項や言語活動例などを踏まえて、次の手順で単元を構想することが望ましい。

- (1) 指導事項を踏まえて、単元の目標と評価規準を設定する。
- (2) 言語活動例を踏まえて、単元を貫く言語活動を設定する。
- (3) (1)(2)にふさわしい教材を編成する。
- (4) 単元の指導と評価の計画を作成する。

以下、この4点について述べる。

(1) 単元の目標と評価規準の設定

本単元の指導事項は、「古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること」(「古典A」の「内容」(1)指導事項ア)である。

ア 単元の目標

- (ア) 「平知盛」を中心に読み味わうことによって、生活や人生について考えようとする。(関心・意欲・態度)
- (イ) 時代背景を踏まえ、古人の思想や感情を読み取り、人間の在り方を考察することができる。(読む能力)
- (ウ) 表現上の工夫についての理解を深めることができる。(知識・理解)

イ 単元の評価規準

関心・意欲・態度	① 「平知盛」のものの見方を踏まえて、生活や人生について考えようとしている。
読む能力	① 時代背景を踏まえ、表現に即して内容を読み取っている。 ② それぞれの場面における人物の思想や感情を読み取っている。 ③ 「平知盛」に焦点を当てて、複数の文章を読むことで、社会が変動する時代の中で生きる人間の在り方を考察している。
知識・理解	① 「平知盛」という人物を中心とした描写を通して、効果的な表現の工夫についての理解を深めている。

(2) 単元を貫く言語活動の設定

本単元にふさわしい言語活動例を学習指導要領「古典A」の「内容」(2)ウとする。「変動する時代の中の人間の生き方を探る」という「学習テーマ」を踏まえ、単元を貫く言語活動を「図書館を利用して知盛が見たものを読み比べ、それぞれの場面に描かれた人物、情景、心情などについて、感じたことや考えたことを文章にまとめて話し合う」と設定する。

(3) 教材の編成

本単元では、『平家物語』の中から「平知盛」が描かれている場面を選び、序

章・第1章・第2章・第3章・第4章・結章に分けて教材を編成した。

序章と結章は、知盛が「見るべきほどのことは見つ。」と言って入水する場面である。第1章は勢いのある平家、第2章は都落ちをする平家、第3章は命をかけた源平の合戦、第4章はついに滅びる平家の様子を読ませ、知盛が見たものについて読み比べられるようにした。

序章（知盛は何を見たのか）

第1教材「内侍所都入（冒頭部分）」

元暦元（1185）年3月、知盛が「壇の浦の合戦」に敗れ「見るべきことのほどは見つ。今は自害せん。」と言って入水する場面。

知盛が平家滅亡までに見たものを探るために物語を読むという課題意識を、生徒たちにもたせる。「知盛という平家の一大将が何を見つめて生きたかを探る」という「学習テーマ」に基づいて課題解決的に学習を進めさせるようにしたい。

第1章（大將軍の知盛）

第2教材「橋合戦」

治承4（1180）年5月、知盛が大將軍として2万8千騎を率いる場面。

頼政の軍を征伐する平家の勢いを読み取らせる。ここで平家の勢力を確認しておくことで、第2章以降の没落していく様子を読み深めさせる効果もある。

第2章（平家の都落ち）

第3教材「聖主臨幸」

第4教材「一門都落」

寿永2（1183）年7月、平家が没落し、一門7千騎が都落ちをする時の場面。

運命に翻弄される人々の姿や、運命に立ち向かう知盛の生き方を読み取らせる。具体的には、平家を裏切る平頼盛や、進言を受け入れようとしない宗盛に対して恨めしく思う知盛の心情などを捉えさせる。また、平家が滅亡する運命について「竜が魚になる」という比喩表現などの理解を深めさせることができる。

第3章（一の谷の合戦）

第5教材「二度之懸（前半）」

第6教材「二度之懸（後半）」

第7教材「知章最期」

寿永3（1184）年2月、命をかける姿が描かれている「一の谷の合戦」の場面。

「二度之懸（前半）」では、苦しみながら命をかけて生きる小名（河原兄弟）の姿を、「二度之懸（後半）」では、命をかけて親が子を救う武将（梶原親子）の姿を、それぞれ捉えさせる。また、「知章最期」では、子の知章を見捨ててまでも生に執着したことに対する知盛の弁明のない心情を読み取らせる。三つの文章を読むことで、命をかけて生きる人間について考察させることができる。

第4章（壇の浦の合戦）

第8教材「鶏合壇浦合戦（後半）」

第9教材「遠矢（後半）」

第10教材「先帝身投」

第11教材「能登殿最期」

元暦元（1185）年3月、平家がついに敗れる「壇の浦の合戦」の場面。

「鶏合壇浦合戦（後半）」では、合戦が開かれる際に、知盛の下知を受けた侍たちは、義経と組み合って脇に挟んで海に入れると言っている。ところが、「能登殿最期」では、教経が義経と組み合おうとするが果たせずに、義経の代わりに安芸太郎たちを両脇に挟んで入水する。

また、「鶏合壇浦合戦（後半）」「遠矢（後半）」では、平家を裏切る阿波民部重能、知盛の進言を受け入れない宗盛に対して恨めしく思う知盛の心情などを、第2章と関連付けながら読み取らせる。「先帝身投」では、動揺する女房たち、一門の幕を自ら引こうとする二位殿、それに従う安徳帝が入水する描写を読み取らせ、知盛の心情を考えさせる。第2章で理解させた「竜が魚になる」という比喩表現がここでも使われていることにも着目させることができる。

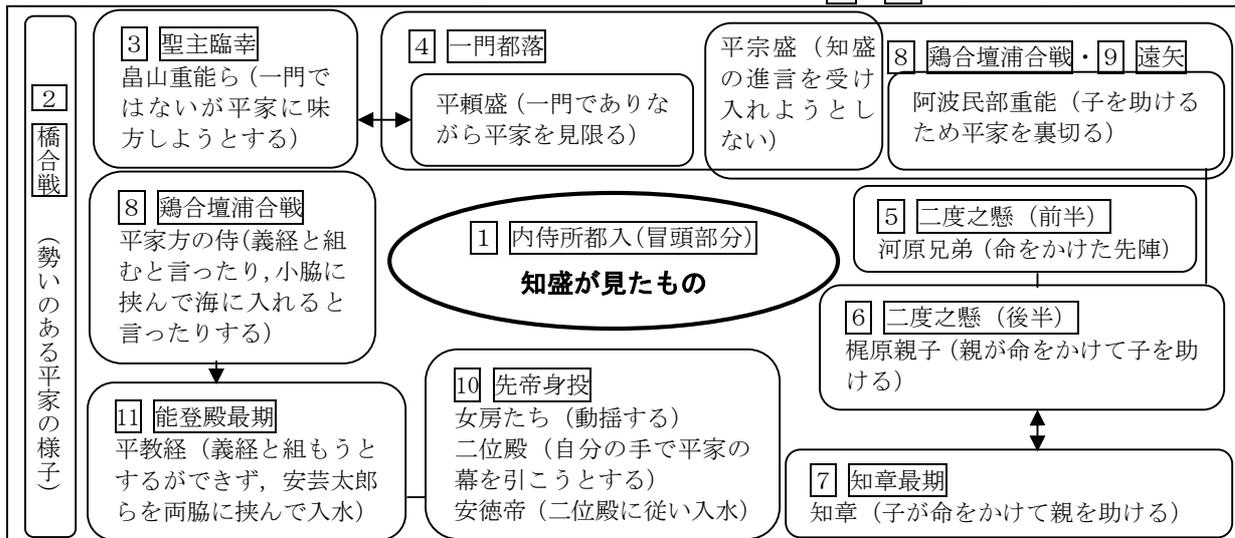
結章（知盛の最期）

第1教材「内侍所都入（冒頭部分）」

序章と同じ場面に再度着目させる。第1章から第4章までの学習を振り返らせて、知盛が見てきたことについて考えたことをまとめさせる。

次は、教材の関連を示した図である。

(1～11は教材の番号を示す。)



(4) 単元の指導と評価の計画 (19 時間)

時間	各時間の目標	評価規準	学習活動
1	<ul style="list-style-type: none"> 「学習テーマ」を確認する。 『平家物語』の中における登場人物としての知盛の役割を捉え、単元全体の見通しをもつ。 	関心・意欲・態度 ①	<ul style="list-style-type: none"> 第1教材「内侍所都入(冒頭部分)」を読んで、問題意識をもつ。 『平家物語』のあらすじを読み、全体像を捉える。 第1章から第4章までの学習の流れを理解して学習課題を設定する。 【学習課題】知盛が見たものを四つの章で明らかにしよう。
2	<ul style="list-style-type: none"> 第1章「大將軍の知盛」において、知盛が何を見ているかまとめる。 	読む能力 ①	<ul style="list-style-type: none"> 第2教材「橋合戦」を読み、知盛の指揮下にある平家軍の様子について、クラス全体で発表し合う。 時代背景を踏まえ、第1章の内容について文章にまとめる。
3 ・ 4	<ul style="list-style-type: none"> 第2章「平家の都落ち」において、知盛が何を見ているかまとめる。 	読む能力 ②	<ul style="list-style-type: none"> 第3教材「聖主臨幸」・第4教材「一門都落」を読み、知盛の知っている平家一門の都落ちの様子について、クラス全体で発表し合う。 第2章における知盛の心情を考えて文章にまとめる。
5 ・ 10	<ul style="list-style-type: none"> 第3章「一の谷の合戦」において、知盛が何を見ているかまとめる。 	読む能力 ②	<ul style="list-style-type: none"> 図書館を利用して第5教材「二度之懸(前半)」・第6教材「二度之懸(後半)」・第7教材「知章最期」を読み、河原兄弟や梶原親子、知盛と知章親子の命をかける様子についてグループで話し合う。 第3章における知盛の心情を考えて文章にまとめる。
11 ・ 16	<ul style="list-style-type: none"> 第4章「壇の浦の合戦」において、知盛が何を見ているかまとめる。 	読む能力 ②	<ul style="list-style-type: none"> 図書館を利用して第8教材「鶏合壇浦合戦(後半)」・第9教材「遠矢(後半)」・第10教材「先帝身投」・第11教材「能登殿最期」を読み、平宗盛や阿波民部重能、女房たち・二位殿・安德帝、また平家の侍たちや教経の様子についてグループで話し合う。 第4章における知盛の心情を考えて文章にまとめる。
17 ・ 18	<ul style="list-style-type: none"> 第1章から第4章までに読み取ったことを関連付けるために話し合う。 	知識・理解① 読む能力 ③	<ul style="list-style-type: none"> 章ごとに描かれている知盛が見たものを、それぞれ整理して関連付けて考える。 知盛のものの見方や考え方について、各自で考えたことを基に、クラス全体で話し合う。
19	<ul style="list-style-type: none"> 単元全体を振り返り、まとめの文章を書く。 	読む能力 ③	<ul style="list-style-type: none"> 第1教材を再度読んで、「見るべきほどのことは見つ。今は自害せん。」という言葉の意味を考えて、文章にまとめる。

本稿では『平家物語』を例として、特定の作品でまとまりのある教材を編成する単元構想を試みた。言語文化としての古典の指導については、「学習テーマ」を設定し、興味・

関心をもたせて読ませる工夫が大切である。

－引用文献－

○ 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』平成22年6月 教育出版 (教科教育研修課)